

大学生活への期待と進路の関係について

— 大学4年生を対象として —

A study on the career path and expectation of campus life

— for 4th years university student —

体育学部体育学科

常浦 光希

TSUNEURA, Kouki

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

環太平洋大学キャリアセンター

影山 映里

KAGEYAMA, Eri

International Pacific University

career center

次世代教育学部こども発達学科

平松美由紀

HIRAMATSU, Miyuki

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

体育学部健康科学科

宮本 彩

MIYAMOTO, Aya

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

岡山大学大学院教育学研究科

伊住 継行

IZUMI, Tsuguyuki

Graduate School of Education,

Okayama University

要旨：本研究の目的は、大学生活への期待と進路との関係を明らかにすることである。調査対象は、大学4年生であり、442名の回答を得た。調査内容として、進路に対する期待と不安、大学生活への期待尺度を設定した。下位尺度得点を用いて、進路との関係について一要因分散分析を行った。部活動等への所属有無及び進路は、大学生活への期待尺度と関係がみられた。さらに大学生活への期待尺度を用いて階層的クラスター分析を行った。3つのクラスターに分類され、進路に対して期待している群は充実型のタイプに多い傾向がみられた。このことから、大学生活へをポジティブに捉えている学生は、その後の進路に対しても期待をいただきやすい可能性が示唆された。今後、大学生活への期待イメージと進路イメージの双方から理解を図っていくことが求められる。

Abstract : The purpose of this study is to clarify the relationship between expectations for university life and career paths. The survey targeted 442 university students and received 442 responses. The survey included a scale of expectations and anxieties regarding career paths and expectations for university life. A one-factor analysis of variance was conducted using the subscale scores to examine the relationship with career path. Participation in club activities, etc., and career path were found to be related to expectations for university life. Furthermore, a hierarchical cluster analysis was conducted using a scale of expectations for university life. They were classified into three clusters, and there was a tendency for the group with high expectations for their career path to be more fulfilling. This suggests that students who view university life in a positive manner are more likely to have expectations for their future career paths. In the future, it will be necessary to

try to understand both the expectations for university life and the career path.

キーワード：大学生活への期待，初年次教育，キャリア教育，大学生

Keywords：expectations of university campus life, the first year experience, career education, university student

I. 問題・目的

2000年代半ば頃から，大学における初年次教育に注目が集まり始めた。学生の学習意欲・目的意識の低下が顕在化し，大学入学後の初年次段階において，教育上の配慮の必要性が問われてきた（中央教育審議会，2008）。特に高校までの受動的な学びから大学生としてふさわしい能動的・主体的な学びへの移行を目指し，アカデミック・スキルやスタディ・スキル系の内容が取り組まれるようになった。こうした教育は普遍化した一方で，その内容は，大学実態に応じて様々であり，大学の生活に適応していくうえでの課題が多様化している状況がある。大学での適応については，友人や親との関係（和田，1992）や進学した大学の志望度（大隅ほか，2013）など，様々な視点から明らかにされてきている。しかし，これまでの大学への適応に関する研究は，環境の変化について注目されてこなかったことから，大学生の入学前の期待と現実のギャップに着目し，大学生生活の期待と現実の測定を試みられている（千島・水野，2015；島田・本間，2022）。こうした大学への期待と現実のイメージ差異によって生じる否定的な反応は，退学や不登校だけではなく，登校している学生の中にも不適応状態の学生がいることが指摘されている（西垣・小林，2004）。こうしたリアリティ・ショックが問題視され（半澤，2007），大学によっては，学習意欲の低い学生や大学に対して適切なイメージを持てていないまま，入学してくる層に対するアプローチとして，レイトスペシャライゼーションのような仕組みを導入する大学もみられる。しかし，現在においても，多くの大学において，出願時に学科や専攻を決めなくてはならない大学がほとんどである。そのため，如何に入学後のギャップを小さくするのは重要な課題であり，初年次生を対象に大学適応について検証されてきた。

一方で，学生たちは大学での学びを経て，卒業後は社会で生きていくこととなる。大学への適応には，卒業後のキャリアを視野に入れた動機付けが重要である（菊池，2018）。初年次教育やキャリア教育では，大学生活への移行を促すと同時に卒業後の職業生活へ移行させる（濱名，2007）ことが求められる。より効果的

なキャリア教育実践のためには，評価を適切に行い，具体的な教育活動の改善につなげていくことが必要である。初年次教育とキャリア教育の親和性は高いことが指摘されている（山田，2012）。適切な大学生活への移行を促すため教育プログラムの開発のためにも，出口調査として，どのような職業生活への移行がなされているのかを把握していくことが必要であろう。

そこで本研究において，卒業前の大学4年生を対象として，大学生活への評価と進路に関する調査をもとに，以下の2点から職業生活への移行について検証する。一点目は，卒業時の大学生活に対する評価と進路に対する期待・不安との関連について明らかにすることである。二点目は，入学時の希望進路及び決定した進路と大学生活の評価の関連について明らかにすることである。

II. 方法

2-1. 調査対象

本調査の対象者は2022年度卒業年次生を対象とした。調査期間は，2023年2月下旬から2週間かけて，Googleフォームを用いたWebによる質問紙調査を実施した。有効回答数は442名（有効回答率：55.1%）であった。なお，本調査への参加は任意とし，回答者の個人が特定できないよう無記名で実施するなど，倫理的配慮を十分に検討した上で行った。

2-2. 調査内容

1) 基本情報及び進路

部活動等の加入状況および役割，入学時の進路希望及び最終進路，進路に対する期待不安項目について選択式で回答を求めた。進路に対する期待不安項目は，「人間関係」「業務内容」「勤務地」「生活面」「給料面」「福利厚生」「ワークライフバランス」の7項目を設定した。

2) 大学生活への期待尺度

千島・水野（2015）が作成した大学生活への期待尺度を用いた。この尺度は，大学生活への期待と現実のギャップを把握するために「時間的ゆとり」「友人関係」「行事」「学業」の4因子20項目から構成されてい

る。

回答形式は、「全くあてはまらない」から「非常によく当てはまる」までの5件法で回答を求めた。なお本調査の統計有意水準は5%未満とし、データ分析は、IBM SPSS Statistics 29を用いた。

2-3. 下位尺度

本稿で用いた下位尺度ごとに内的一貫性の分析を行った(表1)。本稿上では、いずれの下位尺度においてもクロンバックの α 係数が0.80以上を示したことから、本調査票の内的一貫性は担保されていると考えられる。

表1 下位尺度の信頼係数

尺度	下位尺度	項目	α
大学生活への期待	時間的ゆとり	6	0.929
		7	0.95
		3	0.886
		4	0.936

Ⅲ. 結果

3-1. 基本的属性

調査対象者の基本的属性として、部活動等加入状況は「部活動(体育会)」47.7%、「サークル・クラブチーム」16.3%、「所属なし」36.0%であった。次に「入学時の進路希望」は、「幼保」11.3%、「教職」37.6%、「公務員」14.0%、「企業」19.9%、「柔道整復師」10.9%、「プロ・実業団」5.0%、「進学」0.7%、「その他」0.7%であった。続いて、「4月からの進路」

は、「幼保」9.5%、「教職」23.1%、「公務員」14.5%、「企業」33.0%、「柔道整復師」7.9%、「プロ・実業団」3.8%、「進学」2.5%、「その他」5.7%であった(表2)。入学時は教職希望者が最も多く、卒業時には企業就職者が最も多くなることがわかった。

3-2. 所属・進路との大学生活への期待の関連

次に部活動等の所属及び進路に対する期待・不安と大学生活への期待尺度との関連を検討した。分析は、進路期待・不安項目の回答において、「とても不安がある」「不安がある」と回答した群を「不安」、「とても期待している」「期待している」と回答した群を「期待」とし、「どちらともいえない」の3群に分け、各群を独立変数、大学生活への期待下位尺度の各因子得点を従属変数とした一要因分散分析を行った(表3)。

分析の結果、部活動等への所属では、「時間的ゆとり」、「友人関係」で有意な差が認められた。さらにTukey法による多重比較(5%水準)の結果、「サークル・クラブチーム」加入者は、「部活動」加入者に比べ、「時間的ゆとり」因子得点が高い傾向がみられた。次に「部活動」及び「サークル・クラブチーム」加入者は、「所属なし」に比べ、「友人関係」因子得点が高い傾向がみられた。続いて、「サークル・クラブチーム」加入者は、「所属なし」に比べ、「学業」因子得点が高い傾向がみられた。

次に、進路に対する期待・不安項目において、「人間関係」「業務内容」「勤務地」「生活面」「給料面」

表2 基本的属性

		n	%
部活動等の所属有無	部活動(体育会)	211	47.7
	サークル・クラブチーム	72	16.3
	所属なし	159	36.0
4月からの進路 (卒業後)	幼保	42	9.5
	教職	102	23.1
	公務員	64	14.5
	企業	146	33.0
	柔道整復師	35	7.9
	プロ・実業団	17	3.8
	進学	11	2.5
	その他	25	5.7
入学時の進路希望	幼保	50	11.3
	教職	166	37.6
	公務員	62	14.0
	企業	88	19.9
	柔道整復師	48	10.9
	プロ・実業団	22	5.0
	進学	3	0.7
	その他	3	0.7

「福利厚生」「ワークライフバランス」のいずれの項目においても、有意な差が認められた。さらにTukey法による多重比較（5%水準）を行った。「人間関係」において、「期待」と回答した群は、「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、「時間的ゆとり」因子得点が有意に高い傾向がみられた。次に

「友人関係」因子では、それぞれに有意な差が認められ、「期待」「不安」「どちらともいえない」の順で高い傾向がみられた。「行事」因子及び「学業」因子では、いずれも「どちらともいえない」と回答した群は、「期待」「不安」と回答した群と比べ、有意に低い傾向がみられた。

表3 部活動等の所属及び進路と大学生活への期待の関連

部活動等への所属有無	①部活動(体育会) n=211		②サークル クラブチーム n=72		③所属なし n=159		F値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
時間的ゆとり	20.33	6.099	22.38	5.956	20.77	5.834	3.140 *	②>①
友人関係	26.79	6.038	27.31	5.656	25.15	6.496	4.413 *	①>③, ②>③
行事	10.88	2.961	10.81	2.756	10.47	3.021	0.920	
学業	15.31	3.503	15.85	3.414	15.587	0.171	3.545 *	②>③
人間関係	①期待 n=168		②どちらともいえない n=130		③不安 n=144			
時間的ゆとり	22.51	5.570	19.17	5.402	20.35	6.542	12.636 ***	①>②, ①>③
友人関係	28.56	4.922	23.58	6.193	26.08	6.533	26.589 ***	①>③ >②
行事	11.45	2.832	9.75	2.818	10.74	2.970	12.836 ***	①>②, ③>②
学業	16.07	2.990	13.58	3.741	15.46	3.647	20.042 ***	①>②, ③>②
業務内容	①期待 n=159		②どちらともいえない n=112		③不安 n=171			
時間的ゆとり	22.31	5.845	20.05	5.269	19.94	6.372	7.890 ***	①>②, ①>③
友人関係	28.30	5.542	24.46	6.350	25.60	6.183	15.223 ***	①>②, ①>③
行事	11.50	2.821	9.96	3.046	10.48	2.848	10.260 ***	①>②, ①>③
学業	16.08	3.317	13.82	3.818	15.13	3.416	13.803 ***	①>③ >②
勤務地	①期待 n=171		②どちらともいえない n=112		③不安 n=159			
時間的ゆとり	21.63	5.891	19.99	6.022	20.67	6.079	3.185 *	①>②
友人関係	27.87	5.680	24.75	6.403	25.83	6.137	11.595 ***	①>②, ①>③
行事	11.30	2.908	10.22	2.918	10.45	2.920	6.427 **	①>②, ①>③
学業	15.91	3.392	14.27	3.658	15.10	3.541	9.123 ***	①>②
生活面	①期待 n=174		②どちらともいえない n=157		③不安 n=111			
時間的ゆとり	22.30	5.820	19.75	5.905	20.02	6.030	9.097 ***	①>②, ①>③
友人関係	28.25	5.236	24.61	6.485	25.58	6.365	16.229 ***	①>②, ①>③
行事	11.56	2.771	10.10	2.796	10.27	3.136	12.539 ***	①>②, ①>③
学業	16.14	3.145	14.22	3.637	14.87	3.800	12.820 ***	①>②, ①>③
給料面	①期待 n=160		②どちらともいえない n=198		③不安 n=84			
時間的ゆとり	22.17	5.746	20.08	5.820	20.02	6.547	6.437 **	①>②, ①>③
友人関係	28.28	5.264	24.96	6.269	25.62	6.730	14.057 ***	①>②, ①>③
行事	11.38	2.865	10.29	2.802	10.48	3.247	6.514 **	①>②
学業	16.06	2.979	14.51	3.713	14.88	3.998	8.920 ***	①>②, ①>③
福利厚生	①期待 n=198		②どちらともいえない n=176		③不安 n=98			
時間的ゆとり	21.97	5.769	19.84	5.867	20.01	6.553	6.771 ***	①>②
友人関係	28.04	5.425	24.77	6.288	25.12	6.805	15.328 ***	①>②, ①>③
行事	11.35	2.916	10.11	2.829	10.46	3.024	8.859 ***	①>②
学業	16.02	3.205	14.39	3.689	14.53	3.846	11.336 ***	①>②, ①>③
ワークライフ バランス	①期待 n=156		②どちらともいえない n=195		③不安 n=91			
時間的ゆとり	22.62	5.564	19.61	5.726	20.36	6.637	11.751 ***	①>②, ①>③
友人関係	28.51	5.299	24.52	6.225	26.24	6.392	19.481 ***	①>②, ①>③
行事	11.72	2.749	9.99	2.793	10.54	3.146	16.142 ***	①>②, ①>③
学業	16.19	3.167	14.30	3.512	15.14	3.968	12.734 ***	①>②

† *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

「業務内容」では、「期待」と回答した群は、「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、「時間的ゆとり」因子及び「友人関係」因子、「行事」因子得点が有意に高い傾向がみられた。次に、「学業」因子では、それぞれに有意な差が認められ、「期待」「不安」「どちらともいえない」の順で高い傾向がみられた。

「勤務地」では、「期待」と回答した群は、「どちらともいえない」に比べ、「時間的ゆとり」因子及び「学業」因子得点が有意に高い傾向がみられた。次に「友人関係」因子及び「行事」因子は、「期待」と回答した群が「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、有意に高い傾向がみられた。

「生活面」では、「期待」と回答した群は、「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、すべての因子得点において有意に高い傾向がみられた。

「給料面」では、「期待」と回答した群は、「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、「時間的ゆとり」因子及び「友人関係」因子、「学業」因子得点が有意に高い傾向がみられた。次に、「行事」因子では、「期待」と回答した群は、「どちらともいえない」と回答した群に比べ、有意に高い傾向がみられた。

「福利厚生」では、「期待」と回答した群は「どちらともいえない」と回答した群に比べ、「時間的ゆとり」因子得点が有意に高い傾向がみられた。「友人関係」因子及び「学業」因子得点では、「期待」と回答した群は「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、有意に高い傾向がみられた。

「ワークライフバランス」では、「期待」と回答した群は、「不安」及び「どちらともいえない」と回答した群に比べ、「時間的ゆとり」因子及び「友人関係」因子、「行事」因子得点が有意に高い傾向がみられた。次に、「学業」因子では、「期待」と回答した群は「どちらともいえない」と回答した群に比べ、有意に高い傾向がみられた。

3-3. 大学生活への期待の類型的把握

大学生活への期待の進路との関係性について、類型的に把握するために大学生活への期待尺度の下位尺度因子を用いて、階層的クラスター分析を行った。クラスター数の決定は、デンドログラムを参照しながら分散分析を行い、クラスターの特徴を解釈し決定した。分析の結果、解釈可能な3つのクラスターを抽出した(表4)。第1クラスターは、「時間的ゆとり」と「友

人関係」が高い値を示し、「行事」「学業」においても高い傾向であった。したがって、大学生活が充実したものとしてのイメージをしている傾向から「充実型」(19.7%)と命名した。第2クラスターは「友人関係」「学業」が高い傾向を示し、他の因子もほぼ中央値を示している。大学生活に対して全般的に肯定的なイメージが見受け取られる。特に「友人関係」「学業」が充実している「友人・学業型」(48.4%)と命名した。第3クラスターは、すべての因子得点が低い傾向がみられた。つまり、卒業時点では大学生活に対してリアリティ・ショックに近いイメージを抱いている傾向から、「ショック型」(31.9%)と命名した。

3-4. 大学生活の類型と進路及び部活動等の所属比較

大学生活への期待タイプと進路との関係を検討するため、進路に関する調査項目ごとに各クラスターの比率をクロス集計(χ^2 検定)によって分析した。分析の結果、進路に対する期待・不安項目すべてにおいて、1%水準で有意な関連が認められた。進路希望および4月からの進路、部活動等の所属については、5%水準において有意な関連が認められた(表5)。

まず「人間関係」では、「どちらともいえない」で「ショック型」が多く、「期待」で「友人・学業型」及び「充実型」が多い傾向がみられた。一方でいずれのクラスターにおいても、「不安」が続いている。「業務内容」では、「不安」で「ショック型」「友人・学業型」が多い一方で「期待」に「充実型」が多い傾向がみられた。次に「勤務地」及び「生活面」「福利厚生」では、「どちらともいえない」で「ショック型」が多く、「期待」で「友人・学業型」及び「充実型」が多い傾向がみられた。次に「給料面」及び「ワークライフバランス」では、「どちらともいえない」で「ショック型」が多く、「期待」に「充実型」が多い傾向がみられた。一方で「友人・学業型」は「どちらともいえない」「期待」に同程度の偏りがみられた。以上の結果から、進路の期待・不安項目では、大学生活への期待尺度の下位尺度得点が高い傾向であった学生は、卒業後の進路に対して、「期待」を抱いており、低い得点であった学生は、「不安」もしくは「どちらともいえない」と感じている傾向にあることが明らかとなった。

4月からの進路では、「幼保」「公務員」は「充実型」,「友人・学業型」「ショック型」の順で多く、「教職」「企業」は「友人・学業型」「ショック型」「充実

型」の順であった。「柔道整復師」「プロ・実業団」「進学」「その他」においては、「ショック型」が多く、「友人・学業型」「充実型」の順であった。入学時の進路希望では、4月からの進路と同様に「幼保」は「充実型」が多い一方で「公務員」は「ショック型」が多い傾向であった。「教職」も4月からの進路と同様に「友人・学業型」が多いが、「企業」においては「ショック型」が多い傾向がみられた。「柔道整復師」

「プロ・実業団」「進学」「その他」は4月からの進路と同様に「ショック型」が多い傾向であった。

部活動等への所属では、「部活動」加入者は「友人・学業型」が多いが、ほとんど同程度の割合であった。「サークル・クラブチーム」加入者は、「友人・学業型」と「充実型」が同程度みられ、「所属なし」は「ショック型」が多い傾向であった。

これらの結果から、入学時の進路希望と4月からの

表4 大学生生活への期待尺度に基づくクラスター分析の結果

因子名	第1クラスター n=87(19.7%)	第2クラスター n=214(48.4%)	第3クラスター n=141(31.9%)	F値
	充実型	友人・学業型	ショック型	
時間的ゆとり	7.71	0.27	-5.16	279.844 ***
友人関係	8.01	1.46	-7.16	800.184 ***
行事	3.47	0.43	-2.80	290.896 ***
学業	3.93	0.97	-3.89	404.479 ***

† ***p<0.001

表5 大学生生活への期待類型とのクロス集計結果

		充実型		友人・学業型		ショック型		χ ² 値	
		n	%	n	%	n	%		
部活動等 への 所属有無	①部活動 (体育会)	42	48.3	109	50.9	60	42.6	12.299	*
	②サークル・ クラブチーム	16	18.4	41	19.2	15	10.6		
	③所属なし	29	33.3	64	29.9	66	46.8		
人間関係	不安	31	35.6	69	32.2	44	31.2	46.572	***
	どちらとも いえない	13	14.9	48	22.4	69	48.9		
	期待	43	49.4	97	45.3	28	19.9		
業務内容	不安	25	28.7	88	41.1	58	41.1	30.139	***
	どちらとも いえない	17	19.5	42	19.6	53	37.6		
	期待	45	51.7	84	39.3	30	21.3		
勤務地	不安	18	20.7	53	24.8	32	22.7	21.433	***
	どちらとも いえない	26	29.9	61	28.5	70	49.6		
	期待	43	49.4	100	46.7	39	27.7		
生活面	不安	18	20.7	53	24.8	40	28.4	29.906	***
	どちらとも いえない	23	26.4	64	29.9	70	49.6		
	期待	46	52.9	97	45.3	31	22.0		
給料面	不安	17	19.5	38	17.8	29	20.6	16.746	**
	どちらとも いえない	30	34.5	89	41.6	79	56.0		
	期待	40	46.0	87	40.7	33	23.4		
福利厚生	不安	13	14.9	29	13.6	26	18.4	28.234	***
	どちらとも いえない	25	28.7	74	34.6	77	54.6		
	期待	49	56.3	111	51.9	38	27.0		
ワークライフ バランス	不安	18	20.7	47	22.0	26	18.4	33.845	***
	どちらとも いえない	24	27.6	84	39.3	87	61.7		
	期待	45	51.7	83	38.8	28	19.9		

† *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

進路によって、大学生活に対する評価は異なる傾向がみられた。部活動等への所属は、所属をしていない学生については「ショック型」に偏りがみられることが明らかとなった。

IV. 考察

4-1. 調査対象の属性及び進路と大学生活との関連

まず大学生活の期待に関わる変数として、部活動等の所属との関係について分析を行った。分析の結果、「時間的ゆとり」「友人関係」に有意な差が認められた。「サークル・クラブチーム」加入者においては、「部活動」加入者に比べ、「時間的ゆとり」が高い結果を示した。一方で「友人関係」については、「部活動」加入者及び「サークル・クラブチーム」加入者が、「所属なし」と比べ高い結果を示している。この調査結果を鑑みるに、部活動加入者は多くの練習日が設定されている可能性が高く、部活動への加入により、期待していたほど、大学生活には自由な時間が多くないと解釈していることが考えられる。次に「友人関係」について、「所属なし」である学生は、部活動やサークル等への加入者に比べ、有意に低い結果を示した。さらに、「学業」においても、「サークル・クラブチーム」加入者と比べ低い結果である。溝上（2007）は、授業に直接関連のない活動が授業での学習や技能習得をより身に付けていると指摘している。このことから、部活動やサークル等への加入は、大学での友人関係の構築だけでなく、大学での学習を促すうえで重要な活動であると考ええる。一方で部活動での過度な活動は大学生としての勉強時間を残さないほど、熾烈な練習を課している（朝比奈，2017）と批判がある。部活動の加熱化が問題視される現在、大学においても、適切な課外活動の基準設定は重要な課題であると考えられる。

次に進路に対する期待・不安項目は、すべての項目で有意な関連が認められた。どの項目においても、卒業後の進路に対して「期待」と回答した群が高い結果であった。大学生活において、一定の充実を得たとイメージしている傾向の学生は、卒業後の進路に対しても期待するイメージの傾向が高まる可能性が示唆された。しかし、古田（2010，2014）は、サークル活動注力していない学生の方がインターンシップを通じて、キャリア自信が高まる傾向を指摘している。さらに部活動注力者より、していない群のキャリア好奇心が高い結果の報告がある（常浦・田原，2023）ように、一

概に部活動やサークル活動がキャリア形成を促すとは限らない。一方で、常浦・田原（2021）は、就職活動に意欲的な学生は職業選択をなじみのある決定として捉えていると述べている。これらの結果から、大学生活は、部活動のみで充足されるなど、一部の活動に注力するのではなく、様々な活動に参画できる正課外活動の環境整備が求められる。

4-2. 大学生活への期待の類型的把握と進路の特徴

大学生活への期待尺度の下位尺度因子を用いて類型化した結果、3つのクラスターに分類された。さらに大学生活への期待類型と進路の関係を分析したところ、先述したように、大学生活への期待が高い傾向のある学生は、その後の進路に対しても期待をしている同様の結果が得られた。一方で、4月からの進路では、大学生活への「充実型」に偏りがみられた。4月からの進路及び入学時の希望進路がともに「ショック型」であった「柔道整復師」は、卒業直前まで国家試験の受験を控えることとなる。学びの内容含め、大学生活の多くを学業で占めることとなった学生が多くいることが想定される。入学時の希望進路として「公務員」であった学生も「ショック型」に偏っている傾向がみられた。「柔道整復師」同様に採用試験に向けての学習が影響していることも考えられる。しかし、「幼保」や「教職」希望者であった学生は、「充実型」もしくは「友人・学業型」の結果であった。在学中に採用試験を控える進路は、大学生活に対する評価が異なっており、どのような差異があるのかについて詳細な検証が求められる。さらに「企業」希望者においても、「公務員」と同様の結果がみられた。入学時に抱く進路に対するイメージと大学生活の評価には関連があることを示唆していると考えられる。

V. まとめ

本研究は、卒業前の大学4年生を対象とし、大学生活への期待と部活動等への所属及び進路との関連について検討してきた。部活動等への所属有無により、大学生活への期待尺度において、関係がみられた。正課外の活動が学生個人の学習や技能向上につながる（溝上，2007）可能性がある。しかし、溝上（2009）は、日本の大学教育は授業外学習を授業の一環とする考え方が弱く、授業外学習を前提とした授業作りが求められると述べている。正課活動の推進のために正課外活動の充足や環境整備を行っていくことは大学教育上の

重要な施策といえるだろう。

次に進路においても、大学生活への期待と関連がみられた。希望した進路もしくは卒業後の進路によって、大学生活への期待が異なる傾向が示唆された。どの段階で構成されたイメージ（大学生活及び進路）が影響を及ぼすかは把握できていない。今後、詳細な検討が必要となる。

最後に本稿で用いた大学生活への期待尺度は、必ずしも高い・低い得点であることをそのまま解釈できるものではない（千島・水野，2015）。大学生活に対して妄想的なイメージを抱いている場合や高校時代と変わらないと思っていたが、施設の充実や自信の興味関心のある分野が学習できるなど、良い方向と悪い方向の双方のギャップが存在していると指摘されている（大隅ら，2013）。大学生活に対する期待と現実のギャップから生じる否定的な違和感が大学生活への意欲の減退につながる可能性は確かだろう。本研究において、進路との関連がみられたことから、今後、学生が進路に対するイメージや進路決定・変更時期など、進路に関わる詳細な要素との関連について検証していくことが課題である。さらにこうしたギャップがどのような学生に生じるのかについて縦断的な調査が求められる。どのように大学生を受け入れるのか、そして、どのように社会へ送り出すのか、初年次教育及びキャリア教育の手掛かりとなる有効な知見を集積していくことが期待される。

付記

本研究は、IPU特別プロジェクト研究（2022年）の成果の一部です。ここに記して感謝いたします。

引用参考文献一覧

- ①朝比奈なを（2017）部活動ばかりする「名ばかり大学生」の実態「教育困難大学」は学力無視で入学させている。 <https://toyokeizai.net/articles/-/198897?page=3>。（参照日2023年9月3日）
- ②中央教育審議会（2008）学士課程教育の構築に向けて（答申）。 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm。（参照日2023年9月3日）
- ③千島雄太・水野雅之（2015）入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文系学部の新入生を対象として—。教育心理学研究，63，p.228-241。
- ④濱名篤（2007）日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果—初年次教育・導入教育・リメディアル教育・キャリア教育—。大学教育学会誌，29(1)，p.36-41。
- ⑤半澤礼之（2007）大学生における「学業におけるリアリティ・ショック」尺度の作成。キャリア教育研究，20，p.15-24。
- ⑥古田克利（2010）インターンシップ経験が新入社員のキャリア適応力に及ぼす影響。インターンシップ研究年報，13，p.1-7。
- ⑦古田克利（2014）インターンシップ実習中の自律性充足が大学生のキャリア自己効力感に及ぼす影響。インターンシップ研究年報，17，p.1-10。
- ⑧菊池慈夫（2018）進化する初年次教育。山田礼子・藤本元啓・杉谷裕美子共著。初年次教育と小中高の取り組み—多様性を活かすアクティブラーニングの可能性—。世界思想社，p.20-31。
- ⑨溝上慎一（2007）大学生が大学教育で身につける汎用的能力の実証的検討。平成16-18年度科学研究費補助金研究基盤（B）（一般）『大学における学生の質に関する国際比較研究—教育の質保証・向上の観点から—』（課題番号17330165）。中間報告書，p.14-26。
- ⑩溝上慎一（2009）「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—。京都大学高等教育研究，15，p.107-118。
- ⑪西垣順子・小林正信（2004）大学生活への適応状況に関連する要因についての調査。教育システム研究開発センター紀要，10，p.25-35。
- ⑫大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二（2013）大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討：第1志望か否か，合格可能性，仲間志向に注目して。青年心理学研究，24(2)，p.125-136。
- ⑬常浦光希・田原陽介（2021）体育・スポーツ系大学における就職支援プログラムの検討—2020年度体育学科における就職状況から—。環太平洋大学紀要，18，p.301-306。
- ⑭常浦光希・田原陽介（2023）インターンシップ経験と早期的なキャリア支援科目の実施がもたらすキャリア形成。環太平洋大学紀要，22，p.39-43。
- ⑮島田奈美・本間利通（2022）大学生活に対する期待と現実のギャップと大学への適応に関する探索的研究。流通科学大学高等教育推進センター紀要，7，

p.93-109.

⑩和田実（1992）大学新入生の心理的要因に及ぼす
ソーシャルサポートの影響．教育心理学研究，40，
p.386-393.

⑪山田礼子（2012）大学の機能分化と初年次教育—新
入生像をてがかりに一．日本労働研究雑誌，54
(12)， p.31-43.